



郡司：「リ・コンポジションー図工の目標再構成」というタイトルをつけています。ライフ×アートの一つの答えとして、暮らしが再構成されていく、ということを考えているんですね。それは自分の生活を、アートにふれることによって、また

または自分がアートすることによって、何かこう美しいものとか楽しいものとか心地いいものとして見るということ、生活そのものを味わい直せるということがあったらいいな、という思いがもたっています。

学習指導要領は法的な性格があって、教員はその目標や内容を念頭に置きながら授業をするわけです。要するに自分のものにしなければならないのだけど、ややもすると、非常に堅い印象で文章を読んでおしまい、暗記しておしまいというものになりがちなのですが、それをキーワードで、あえてローマ字にして漢字の軽重をもう少しフラットな状態にして、自分がその言葉をどんなふうに捉えるのか、そこに形や色を織り交ぜていった時に、自分がどういうふうに配置し直して自分のものとして実感として受けとめるのか、手を動かして再構成してみるという取り組みです。どこか自分が一工夫することや手間かけることによって、自分の生活を変えて行くことと同じように、新しく先生になられる方々には、与えられたものをそのまま受けとめるのではなくて、自分でつくり出して行ける、自分はこう解釈するというを自分のことばで示せる人として現場に出ていくってくださったらいいな、という願いです。

辰巳：小泉さんののは、子どもの作品がずっとビデオで流れています。



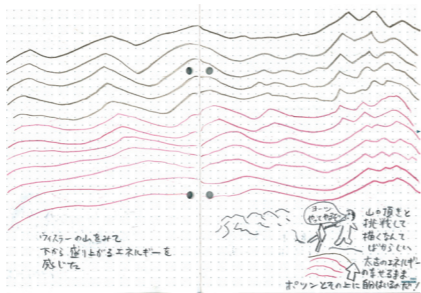
小沼：普段の「アート」の授業の中で出て来た子どもたちの探求的な言葉ですとか驚くような発見した言葉というのを作品としてだせたらいいなあとやってみました。レゾのドキュメンテーションの取り組みとかを教えていただいて、ああ、そういうことができるのかと、私も挑戦してみたいなと思ったんです。このハーフミラーがナーサリー（保育園）から大学までのお茶のアートの学びを先生方と連携して出していける場になるとすごくこれから可能性を感じるし変わっていくのかなと思います。私自身、久しぶりに立体を制作しました。今回自分の思い通りにはいけない素材を意図的に選びました。夏休み中、素材と対話しながら体中傷だらけになりながらつくりました。アートの授業中の子どもの姿やつぶやいた言葉の一つ一つふりかえりながら作りました。

辰巳：「もうす もうす」というのは、このOCHA HOUSEという実験住宅がハーフミラーの展示会場になって、その時にこの家は何を語るだろう、というこ



とを外に吹き出し形式で描いたのを土に立てました。それで、瀧田さんの「こねてこねて」もついでに言っちゃいますけど、粘土は信楽とテラコッタを混ぜて手でこねているうちに、何をつくるというよりは、手の感触がつくり出すということ。その時に、たまたまできたものがいらっしやい＝ウエルカムのように見えたんですね。

一番奥にある私の「つれづれ大福帳」なんですが、つれづれなるままに、大福帳というのは昔の帳簿ですね、小遣い帳のことです。家庭的な用を二つこなさないといけないんで…カナダに行くことになったんです。前半は、息子の結婚式に出席するためだったんですが、後半は、カナダの親戚、90歳の方へ顔見せに行こうという、その二つをこなす使命がありました。行く前は、ちょっと心配でもあったんですが、こういうのをリアルタイムに描いていくことによって、自分の心の安定が保てる。現実ドロドロしていて語れないようなことも中にはあるんですが、かくことによって美化するわけじゃないんだけど、なにかそういう世界に自分をもっていく、そういう力が表現することにはあるという気がします。ウェディング中、抜け出して山をスケッチしていたら、大きなことに気づいたんです。今、目の前にある山の頂ぎっていうのは、自分が対する山じゃないんだ。大地のエネルギーが下からこみ上げてきて、そのうえに、ちっけな自分が立っているんだってということに気づいたんですよ。それをそのまま、なんか線で表しちゃったんです。今ある現実と、向き合っているうちに、あれ自分はこういう山に対してなにか挑戦してやろうというのは非常にくだらないことで、大地から湧き上るエネルギーってすごいんだなと感じて自然にこういう線がかけた、それがもしかしたらアートかなって思います。



瀧田：私の日常の時間軸というかねメモリアルで、非常にプライベートな私にとっての一本の草、私にとっての一本の糸というものを単に織り込んでいったものです。それが美しかったり人に紹介する必要がないという、極めてプライベートな「もの」なんですよね。という、いわば日記とでもいうものです。

一同、解説を聞いた後に自由に作品を見て回り終了。

第15回

Half Mirror

2012年8月23日(木)～27日(月)

お茶の水女子大学 ライフ×アート プロジェクト 報告

会場 OCHA HOUSE ユビキタスコンピューティング実験住宅

応援 お茶大 ECCELL(特別経費「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業)

展示作品

「Drops of creation 2012」小沼律子

「箱の中の世界」野口昌代

「シュガーロード(波照間島)」堀井武彦

「多色木版画」「テラコッタ」

堀井武彦+教材研究(図画工作科)のなかま

菫浦知佳 小林美歩 乗鞍美紗 松田周子 中村紘子

小野めぐみ 濱口里紗 矢田貝麻里 山崎さくら

「中学校美術科の実践」小泉薫

「リ・コンポジションー図工の目標再構成」

郡司明子+図工科教育論のなかま

織田望美 伊藤愛 佐竹沙理 菅原佳菜子 立花久未子 本間千晶 山口ゆみ 阿部祥子 木下紗希

小路貴恵 滝脇綾 野崎詩織 芳賀安 廣田万里香 文傳華 石井茉鈴 石丸椎菜 崎間南

須野原杏子 橋詰彩季 羽山祥世 松林悠貴 村上奈菜子 池田乃莉子 加藤香恵 狩野董子

熊川美咲 黒木咲 菅原麻佑 武久梨奈 新倉理沙 芳賀菜都美 樋山麻優子 平岡美緒

松本彩香 真鍋未央 真鍋友嘉 安田夏海 吉岡リサ 米田ひかる 丸山実花 足立咲子

森田育 小林美歩 小野めぐみ 伊藤礼奈 荻田椎菜 小野千裕 金子由佳 河崎佳子

田中えみ 堀居真子 村上千晶

「革の流れのように」「こねて こねて」「もうす もうす」

瀧田節子+辰巳豊+保育表現のなかま

伊藤礼奈 荻田椎菜 小野千裕 金子由佳 河崎佳子 立山香 田中えみ 南陽慶子

新島美枝子 堀居真子 宮沢愛 村上千晶

「もの日記2012～だいにじにしてきたもの」瀧田節子

「つれづれ大福帳」たつみ ゆたか



2012年8月23日(木) 17:30～19:00 トークイベント

テーマ「ライフ×アートを考える」



○ハーフミラー

辰巳：お茶の水のシンボルは、「鏡」です。校歌は、「みがかずば、玉も鏡もなにかせん…」。そういう立派な鏡から比べると、我々は半人前。また、ハーフミラーといえばマジックミラーの意味もあり、ふたつを掛けた会の名称で、15回続けてきました。当初は、小学校、中学校、高校、OBの先生たちの同好会的な展覧会でした。子どもが随分見に来てくれたものですから、会場をお茶の水に移してできないかと願っていたところ、このOCHA HOUSEという実験住宅を使わせていただく幸運が訪れました。内容は、子どもとアートを語る会にしていきたいなと思いました。これを仕掛けてくれたのが、幼児教育と発達心理学が専門の刑部先生です。はじめ考えたテーマは、アート×ライフです。しかし、その順番を逆にしました。ライフの中から自然とアートというものが立ち上がる方が望ましいだろうと。というのも、常々学校教育に対するアンチテーゼを考えていたからです。多くの場合、教える内容があって、そこだけ取り出して、子どもたちに「今日はこれをやるから」と投げかける。学校という枠組みでは、避けられないことなのかもしれないですが、もうちょっと原点にかえて、人間のライフというものからアートはどういうふう立ち上がるのかなということを大事にしたい。この展覧会を通して、それを考えてみようと呼びかけました。もちろん、人によってライフも違うし、考えているアートも違うから実際には多様な作品が集まっていますが。

○ライフ×アート

郡司：一般的にアートという響きは、なにか特別なものとして、生活とはちょっと離れたものとして捉えがちなんじゃないかなと思うんです。震災直後、まずは自分たちの命をつなぐこと、衣食住に関するところで精一杯で、誰もアートや美術ということに気持ちが向かなかった。それでも、美術教師をなさっている方が、仮設住宅に置く表札を高校生たちと作っていくんですね。流れついた廃材を切って磨いて、そこに住まう人たちのことを思いながら名前を彫って、色を加える。手づくりの表札を一軒一軒手渡ししていくと、それまで同じ規格で、無機質、無表情だった仮設住宅に、彩(いろどり)が生まれ、家にも人々の表情にも明るさが取り戻されていく。アートは、まさに生活から必然的に生まれるものであり、日々の衣食住とのつながりにおいて芽生えるものだと感じたんですね。

南陽：ライフというと、日常。アートというと、ちょっと特別、非日常。そのときに、日常と非日常って私はどうやって考え分けているのだろうか？日常と非日常というのは自分自身がつくり出していて、それがゆらいだときに、何か面白いものができるんじゃないかな、面白い空間が生まれるんじゃないか。以前、幼稚園でのワークショップで粘土遊びをしたんです。活動後に子どもたちの様子について気づいたことや感じたことを話す、すごく違うんです。私は、その時間の子どもたちしか知らないのですが、その中で何かお話しできないのですが、先生方は日々の流れの中でその子どもの表現をみる、だから、昨日こんなことがあったからこうしたのかなとか、おうちでこういうことがあるから、こういう表現が生まれたのかなと考えますというんですね。その時に、保育者の方が、私が子どもがこんなことをしていたということをごくよく覚えているということに驚かれ、1時間の活動の中でどんなことをしていたかということをこれだけ気に留めていられる方は今までにいなかったとおっしゃったんですね。私はその時間だけが勝負というか、関わっていただけるので、「それだからですよ」とお話ししたら、それを聞いていらした園長先生が「両方あるからいいんじゃない？」と言われました。毎日の流れの中で子どもを見てくれる人もいて、時々来て、そのときの子どもの一瞬を逃さずに見る人がいて、両方あるからこそいいのであ

て、そのかわりが大事なんだということをおっしゃってくださったんですね。どちらもあるというのが、アートの場で生まれうる可能性なのかと思いました。ライフ×アートということを考える時に、日常と非日常の関係というものをあらためて自分の中でとらえるきっかけになりました。

辰巳：ちょっと遡って、私がお茶大に来た時のことを振り返ってみます。お茶の水の幼稚園は伝統的な自由保育でして、小学校はそれのスムーズな受け皿としてスモールスクール構想というのを15年前に実施しました。123年学校と456学校が全く別の学校として運動会や行事なんかも行うんです。123年生は、教科という考え方を捨てて日々の活動を考えるところからスタートしました。教科の間を埋めたり横断的につなぐ総合をやるのではなく、まずは子どもの生活から始めようという試みだったんです。その時、たまたま私は1年生を受け持ちまして、本当に何にも教科がない、時間割もないというところで日々の活動を進めていきました。まさにライフそのものがアートであるということをやっていたんですが、長続きしませんでした。やっぱり教科的なものの取り出しが必要ということで沈んでしまいました。今は、当時活動の中核だった「創造活動」そのものが昔ほどの勢いがなくなっている気がして残念です。図画工作科においても、まず年間のカリキュラムがあって、教える内容があって、そこから1時間の授業をつくっていくという流れがありますよね。それを逆転できないかなということを常に考えていたんですけども、なかなか前へ進まない。そういう時に、刑部先生から保育表現の授業をやってみないかというお話をいただき、再び原点を考える機会を得たことを、ととても感謝しています。幼児教育は本来、そういうことができると思うんですよ。大学で保育の事を教えるのにはやっぱり現場を知らなきゃというんで、自分からいろいろ求めて、まあお絵描き先生で保育現場に飛び入りで入ったら、これがまた理想とは大違い。この時間にこれだけ教えてください、そういう世界なんです。小学校はまだ、指導要領とかあって、日本の義務教育のレベルはものすごく世界的に高い、悪く言えば金太郎飴かもしれないんだけど、それを考えると幼保の教育はまだまだ混乱しているようです。堀井：私はいま、1年生をもっているんですがね、いま辰巳さんが言ったような形で、今年は幼小の接続期をできるだけゆるやかに考えて、幼稚園からあがってきた子どもたちを初めから教科の枠にはめない形の教育課程を組みたいということをやっています。ただ、私が専科的に関わっていることから、実質的には時間割で動いているという現状です。造形的なことを1年生の段階で教科として上からおろして行くのではなく、生活や遊びと関連したところでやるという、その理念はおおいに賛成なんですけど、実際、制度の中で考えると、よく生活科が入ってきたときと同じょうになにかものをつくったり、絵を描いたりしているんだから図工は少なくともいいんじゃないかという考え方もあり、実際に今お茶小では、専科である私と担任の先生と内容をすりあわせて行くことで環境を含め、できるだけ理念に近づけようと努力しているところではありますね。

瀧田：1週間の中で2時間という時間を、私は感じ取ってそれを自分らしく楽しむという、それが主に材料と関わりながら、自分自身の世界をつくっていき友達と関わる、そういう日常をイメージして授業をしてきました。こういう時間があるから、これをやるんだよというプレゼンテーションではないことをしようかなと。なんで私が、子どものリズムや生活を自然のなかでもって、そこに自分の授業としての1単位時間をもってきたかったかっていうと、いわゆる図画工作科の存在そのものが時代と共に変わっていくべきであると思っているからなんですね。日本では明治時代から、税金で手工でも臨画でも教えた歴史がある。それは生活というよりは、手に職をつけるというね、富国強兵のために国民を一兵卒として育てたかったわけですよ。だけれどもやっぱりそこから100年以上たって、まだまだ成熟していないわけです。やっぱり図画工作も公教育で税金を使ってやるのですから、生活の中に、美術の資質や美術的な視点を、いかに普通にもつか、ということを私は学校現場で考えてきたんですね。

気仙沼の美術館の学芸員さんのお話を聞いたんです。被災された方々に対して、音楽で何かしようというときには、有効であったと。しかしながら、図工美術の分野の人たちは何ができたか？色や形でもってわっともってきたとしてもそれでは癒されないと言われました。それに対して、私は、社会そのものが変わる可能性があるということを発表しました。被災者が体育館や公民館で生活するわけですよ、マットをしいたり、段ボールなどで物理的に一人ずつのスペースを仕切ったり寒さをしのいだりするわけですが、その他に肌触りとか落ち着く色、とかまで考えただろうか、たいへんな特別なことがあったときに、そういうことを考えてものが用意されていくということが当たり前になるように、図工美術で色や形やテクスチャーで何かを考えたりつくったり、という教育があらゆる場で行われることによって、社会そのものが変わって行く可能性がまだまだあると。

江原：その学芸員さんがおっしゃったのは“即効力”だと思うんですよね。その場で、実際にほどこすということと、一枚の絵は違う、それは学芸員さん自身もお分かりだと思うし、生きるためかもしれないけど、工夫してつくった一つが人々を勇気づける、ということも分かっているしやるので、もう少しお話をしていけば、そこだけではないことに広がっていくだろうと思うんですね。アートの様々な力というのは、一枚の絵だけではないコミュニケーションも含めて、広がる話でもありました。

郡司：瀧田先生がおっしゃられていたことは、冒険家の石川直樹さんのお話に通じるなと思いました。彼が言うには、アートの語源である「アルス」には医術の意味もあって、芸術と医術は非常に近いと。人が生きていくというときに、よりよく生きるにはどうしたらいいのかと冒険をしている際、極限状況になると、その感覚が働き出すと。その時には、今、自分はどちらに進むべきか、それとも立ち止まるべきか、そういう直感、自分のプリミティブな感覚が働くのだと思うんですね。人が極地で生きていこうとするときに、何を選び、何を心地よいとするのか、より安らぐ空間とはどうあったらいいのか…そういう感覚の働き方と同じだなと思いながらお聞きしました。生活する、生きることというのは、それをどうよくしていくか、というアートの考え方なんじゃないかなと思いました。

○展示作品

刑部：話が大きく展開して行きましたが、ここで今展示されている作品について皆さんに語って頂ければと思います。

堀井：僕は沖繩が好きだから、その絵を描いています。

今年初めて大学生の教員養成の授業を持ちました。19歳という、つい自分が今まで教えてきた、あるいは、つい最近の日本の教育を受けてきた子たち。その子たちを通じて、今の日本の図工教育の位置が見えてきて興味深かった。中学までで、美術的なことをやってない子も多くて、止まっていたものが溶け出すようにみんな一生懸命やってくれたから、あんなに素晴らしい作品ができたんじゃないかなと思うんですね。小学7年生を教えているような気持ちで、すごく楽しくできました。この子たちが現場に行って図工を担当することになったら、よりやわらかな感じで子どもたちと向き合ってくれたらな、という希望が持てました。

辰巳：この3つは私が保育表現で行ったものなんですが、南陽さん、学生としてやってみてどうだったかということをお話してもらえますか？(表紙写真)



て、次に私が、このへんをやりました。うまい具合にかすれて、赤と白、交互になり始めたのを見ていた学生さんが、「あ、それ面白い」というので、しばらく3人で縦横無尽に道をかくみたいなのをはじめて、その間も会話がないままに体だけ動かして、その人が動かした体の軌跡をみて、その動き面白いと思うとまねした動いたり、線をクロスさせてみたり、かわかりに行ってみたりということをしてこれ

てきたんですけど、向きを決めてやったわけではないので、上下もないですし、中心となるものがなく、点在しているというか、起点がないまま増殖していくような作品になったと思います。

辰巳：線をかくことの楽しさを味わうことの中に3人が何かを感じ合って何かをつくり出して行く、という感じのねらいです。

郡司：3人のライフが触発しあって交わり合ってアートになったというお話でしたね。辰巳：ま、そうですね。ライフを大きさで考えずに、いまいる自分が交わり合うと

アートになるということの一つの実証かな、と思いますね。瀧田：切れ端の革を使って、生活に役立つもの編んで行くとか籠になるとか、コースターとかを提案しようかなーと思ったんですが、そうではなくて、残り物という役割から解放されたものということで、丸や三角や四角をならべていくうちに、自由に発想して自分の世界をつくっていくという作品になりました。みなさん、絵をかくつもりでつくられたんじゃないかなと思います。

野口：「箱の中の世界」ということで小学校2年生の授業で行ったものです。ティッシュの箱の中に自分の世界を表現していくものです。アートの授業で人と人が関わるのと同じくらい、自分に対して向き合うということが大事だなーと考えていて、限られた箱の中に自分の世界をつくるという授業を行いました。かなり、没頭して黙々とやっていたのが印象的で、つくっている子には例えば海だったら、見た目以上に

その子には見えている何かがあって、例えば、それまでにいた場所とか、楽しかった記憶だとかそういうことを黙々とつくっていたのが印象的でした。また、つくったものを見せあったり、つなげたりして共有する場が自然にできていました。実際の子どもの作品はないのですが、子どもたちの声という形で、どんな様子だったのか、ということも展示しました。

